The Material？~ Slaughter In The HEAVEN~

音十　充実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｎ Ｔｈｅ Ｍａｔｅｒｉａｌ ？ ～ Ｓｌａｕｇｈｔｅｒ
Ｉｎ Ｔｈｅ ＨＥＡＶＥＮ～

【Ｎコード】
Ｎ３７８１Ｐ

【作者名】
音十　充実

【あらすじ】
運命の、『世界の末裔』の『四人』の戦いから、無事帰還した御神　哀。
そして、再び再開する能力者達の戦い。だが哀が行った先は瓦礫の山で？
更には人類との戦い。哀達は戦争の中で、ＨＣ－Ｒと自分達の真実を得られるか。
では、Ｉｎ Ｔｈｅ Ｍａｔｅｒｉａｌ シリーズ。始まります！

！！

注・Ｒ１５指定は一応。残酷（ｒｙも同様。

※重要・この小説は一時休止しています。続きを楽しみにしておられるかた、どうもすみません。再開は未定です。予定は未定。すみません。

はじめに（別に無くてもよくね？）（前書き）

あ、また会いましたね。

え？　会ってない？　それはすみません。

はじめに（別に無くてもよくね？）

初めに。

この作品『Ｉｎ　Ｔｈｅ　Ｍａｔｅｒｉａｌ　？』は、タイトルから分かる通り、『Ｉｎ　Ｔｈｅ　Ｍａｔｅｒｉａｌ　？』の続編です。そして、それを見なければ多分この小説の最初を読んでも分からないと思います。

……申し遅れました。私、作者のシャーペン芯ケースです。
今までこのシリーズを読んで下さって、「やっと四部目出やがった」と思ってくださる方にはお久しぶりです。
そして、これが初めての方はハジメマシテ。

多分、この作品は『厨二病たっぷり』、『設定マニア』、『意味不明』、『主人公最強』、
などの要素がふんだんに詰まっているので、それを許容できない人は戻るボタンを押した方が良いかと。

出だしからこんなｇｄｇｄな感じですが、では参ります。

Ｉｎ　Ｔｈｅ　Ｍａｔｅｒｉａｌ　？　をお楽しみなさってください！！

注・作者に文才を求めても、文法を求めてもいけません。
　これは作者の一身上の都合による身勝手な判断です。

第一話　非異世界《リターンザワールド》

覚えているだろうか。

俺が持っている力、『祖体制御』。通称・マテリアルコントロール。
万物を操る能力。

これは人殺しの能力だ。
人に触れれば血が飛び、骨が折れ、肉が弾ける。
でも、ここに来れれば良いと思っていた。例え、俺がどんなに罪を犯そうとも、

最愛の人……紫、その人なら、笑顔で迎えてくれると思ったのに。

なのに、何でここに、皆は居ない？

何で紫が居ないんだ！？

瓦礫の上に座って、そんなことを考えていたらとっくに夜になっていた。

明かりは無い。
しかし、見える。遥か地平線、何１０キロも先。

「此処が、俺が死んだ場所だったなら……もう既に、『ＨＥＡＶＥ

N』は無くなってたのか？」

様々な疑問と憶測が頭を駆け巡る。だが今は、

「人に会って、話でも聞くか。時の進みに問題は無いよな」

誰も居ないのでさっさと黒い迷彩服。もとい『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の制服に着替え、歩いた。

別に能力を使って飛んでも良いのだが、しばらくここらへんを歩いてみたかった。

広大な敷地である『ＨＥＡＶＥＮ』も、あちらの世界で歩くのに慣れたので、少しも疲れを感じなかった。

ふと、思い出して話しかける。

「そういえばお前、居たんだっけ？」

『いるわ！！　何ほっといて話し進めてんだよ！！』

あ、居たね。別にドーデも言いけど。

「……そろそろ街か。って、え？」

俺が見ていて、目指していた光の束は、街のものではなかった。

そう。キャンプの集団だった。しかも形状と規模からして軍隊の。

そして、そこから出てきた人……つまりは軍服を着ている奴に、見

られた。

ここからでも、ソイツが驚き、大声を出して騒ぎ立てているのが見える。

なんだかとても危ない気がしてきた。

もしかしたら皆は絶対居ないよな。

いや、もしかしなくとも居ないな。

だってさ、

「何でアサルトライフル持って出てくんだよ！！」

結論。

ここは、能力者がいてはいけない場所のようです。

「……投降する。撃たないでくれ」

ならばと、能力者では無いフリ。

すると、アサルトライフル持った兵達に囲まれた。その数多分二十人くらい。

今ここで能力を使うのは得策では無い。

相手の事情や、現在の勢力状況を聞きだし、判断するしかない。

一つの、多分幹部級がいるであろうテントから、一人の男が出てくる。

「……投降したのは貴様か？」

「ここは何処ですか？　俺はなんで囲まれて……？？」

とりあえず演技をして誤魔化すしかない、か。

「なるほど。訳有りのようだな。ゆっくりと話でもどうかな？」

すると、やけにあっさりと、拘束を解いてくれた。
お偉いさんは俺に手招きし、ついてこいと言う。

そして、テントの一つに入ると、そこには机が一つだけ。ポツンと置いてあった。

「さて、話に入ろう。貴様は能力者か？」

「いいえ。それより「今は質問にのみ答えてくれ」」

ま、そうだろうな。見ず知らずの一般人（じゃねーが）にすき放題情報与えるほど、間抜けでも無いか。

「ならば何故、ここに居た？　見たところ北から来たようだが？」

「北……というのは俺がいた方ですか？
すみません。ここが何処だか知らないのですが……」

「何ッ！！！？？？」

凄い剣幕で立ち上がり、こちらを睨むおっさん。

あれ？　もしかして誤爆？と思ったが、再び座る。

「此処が何処だか知らない。なるほど。……記憶障害の類か？　いやしかし……」

やはり反応からして、ここは『ＨＥＡＶＥＮ』。しかも、コイツらは能力者じゃ、無い。

もしかしたら、と、ふと頭の隅を過ぎる考え。

だが俺は、それを振り払う。認めたくなかったのだ。俺が、俺が向こう側に居る間に、

「曹長！！　敵襲です！！！！！！！！」

突然テントに入ってきた兵が言った言葉も、聞こえなかった。

認めたくなかったのだ。

『ＨＥＡＶＥＮ』の能力者が――――――人類と戦争しているなどという、馬鹿げた考えは。

火が降り注ぐ。

水が流れる。

雷が迸る。

風が舞う。

雪が吹雪（ふぶ）く。

地面が割れる。

それが、外に出て真っ先に思った事だった。
間違いなく、能力者のもの。
「……皆が、居るのか……？？」
その阿鼻叫喚、だけれどもただ一人の人さえ死んでいない矛盾。
これは殲滅戦では無い。まるで、捕虜を獲得するための戦闘。……
いや、もっと単純に、
「相手を傷つけずに戦ってる？」
そう見えた。
「……紫……聊爾、琴雪、不知火、明、皆が居る！！」
瞬間、俺は走り出した。
後ろから兵の制止の声が響くが、構うものか。
もう情報を集めずとも良い。後は……
「俺が自分でやるさ！！！！！！！」
能力発動。
『祖体制御』。
いつも通りの翼をイメージ。
その想像が、現実にカタチとなり作られる。

材料は一種類。それは大気。

正確には何種類かあるのだが……その説明は省く。

ダンッ！

足元に転がっていた瓦礫を勢いよく蹴り上げ、そして———

飛び上がった。

第一話　非異世界《リターンザワールド》（後書き）

いつも通り、前書きにもあとがきにも書くこと無い……。
どうすれば良いんだろう……。

「寝れば？」

あ、そうしよ。

……誰？

第二話　死人慟哭《デッドリーリヴィング》（前書き）

ああ、疲れたな。

……久しぶりに書いたからか？

第二話　死人慟哭《デッドリーリヴィング》

???ＳＩＤＥ

暇だな……。今日も暇だ。
いつも通りの夕日を確認した後、行動を開始して、普通の人間達を殺さない程度に半殺し。
……たまには虐殺とか許してくれないのかねぇ。

ピーッピーッピーッ

「あ？　何だ、お前かよ」

通信機の向こうから聞こえる罵声を聞き流しながら考える。

「……そろそろ虐殺タイムにできねーのかよ？」

『アンタ馬鹿かよ！　そんな事したら簡単にそいつ等全滅するだろうが、カス！！
それよりもさっさと帰還しろ！！』

「うるせぇー！！　大体お前は何なんだよいっつも！！！」

『うるさいのはアンタだこの複製野郎！！』

目の前で閃光が散り、そのたびに銃を手に持つ兵士が五、六人まとめて吹き飛ぶというのに、
余裕とでも言わんばかりの、まさしく『いつも通り』で対応する男。

「あー。通信切るから。ウザいし」

『ハァ！？　ちょッと待ち――――――――

どうでも良いし。
それより、そろそろ時間か。

「帰るか。今日もここまでたどり着ける面白い奴は居なかったか……」

強い奴と殺しあいてーな。

と、狂った考えをしている男の後ろに、ただ一人だけ、
立っていた男が居た。

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「……何なんだよ、これは！！！！」

機銃を持った兵士の上を飛びぬけ、そしてたどり着いた最前線は、全くと言って良いほど血が無かった。

一人の、遠く離れている奴から飛んでくる炎の流星は、人間の軍のど真ん中で爆発し、吹き飛ばす。

だが、それでも人を避けているというのは分かる。

でも、それでも、おかしかった。

「……死人を制御する能力？」

そこには、俺が三年前……と言っても、こちらと向こう世界の時間軸が同じならそうだが、その時に、

ＨＣ－Ｒシリーズの襲撃で死んだはずの、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』部隊の仲間が、蠢いていた。

一人は、両手が切り取られたまま、その赤黒い変色したモノの周りに蝿（はえ）を集（たか）らせている

一人は、目がくり貫かれ、その白いピンポン玉のような球を服に引っ掛けながら、骨を腹から突き出している。

一人は、顔の半分がごっそりと無くなり、白い固形物とピンク色の液体を周囲に撒き散らしている。

……どれも、残虐極まるＨＣ－Ｒの能力によって弄んで殺されたであろう死体達だった。
ただ一つの共通点は、その死体全員が、致死には至らない能力の攻撃をしてくること。

「よく、俺は立ってられるな……」

『耐性でも付いたんだろ』

「そんなもんかな？」

だが、今はそんなやり取りしてる場合じゃない。
絶対に、こんな仲間を落とすような事、紫達がするはずない！！！
再び背中に大気の不可視の翼を作成し、飛び、
様々な能力の閃光の中を飛び抜けた先、見えた。

一人の男。既に後ろを向いているが、アイツだけが自分の意思で動いている。
下手したら、『ＨＵＭＡＮ』の輩かもしれない。

その後ろに着地し、言った。

第二話　死人慟哭《デッドリーリヴィング》（後書き）

皆さん、覚えていますか『ＨＵＭＡＮ』。それと『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』。
そして、『ＨＣ－Ｒ』。
……覚えてない？　そんなぁ！！　俺がもっと印象付けが上手かったらぁぁぁ！！
けどやはり、俺は超能力を書いてる方が良いです。（個人的なかんじ）

第三話　製造番号《アインス》（前書き）

第三話目投稿。ひさしぶりの戦闘が下手になった。

第三話　製造番号《アインス》

右手を挙げ、機械の駆動音と同時に発射される、轟音の元。
勿論、マシンガンである。

あちらの世界でも使っていたが、やはりこちらの方が使いやすい。

そして、その弾丸は目の前にいる男に吸い込まれていくように向かう。

こういうためらいが無いのも、耐性、かな？

どうでも良いが。

だがこんな事で死ぬ訳が無いだろう。相手は能力者。
能力者とは、戦車よりも硬く戦闘機より攻撃機よりも早い。

だからこれは牽制。

「何だよお前」

やはり機関銃程度はどうにか止められたようで、相手の背中から数センチ離れた空中で停滞している。
そして、ソイツがこちらを向く。

「…………！！！！！！！！！！」

言葉が出なかった。
覚悟はしていたはずだった。そう。
コイツと会う事だって、容易に想像できていたはずなのに。

「ああ゛！？　御神ィィ！！！　お前何でテメエここにいんだよ！！！！！！！
分からねえなあああああ！！！！！！！！」

相手が多少驚愕しながらも、こちらに突っ込んでくる。
コイツの能力は……

相手の手から閃光が走る。それは徐々に形を作り、そしてそれは剣となった。
長い剣だ。雷を圧縮したような、発光していて逆光で、輪郭しか見えない剣。

「『雷電閃光（ライトニングレイ）』。なるほど、死体を操ってたのも生体電気ってわけかよ」

「うるせえな！　お前はとっとと死ねよ！」

駄目だ、抑えろ。
今ここで暴れても、何も無い。こいつにも逃げられちまう！

でもよ、やっぱり俺は止まれないよな。紫達の為にも。

「能力発動！！　対象大気ィ！！！！！！！！」

殺す！！！！！！！！！！

絶対に殺してやるよ。アインス！！！！！！！！

『ＨＣ－Ｒ』シリーズ。

お忘れかもしれないが、人口的に能力者を作る計画。ホムンクルス計画。

そして、それと追随してある、コード・リプレイ計画。

更にその二つを合わせ、凶悪にしたのが勿論、『ＨＣ－Ｒ』計画。

能力者で世界を統一するための組織、『ＨＵＭＡＮ』。

そしてそこで研究され、生み出された最狂の能力を持つホムンクルス達。

アインス・ツヴァイ・ドライ・フィーア・フュンフ・ゼクス・ズィーベン

それぞれが人間のようであって、同時に人工人間。

「……待ってたよ。待ってたぜ。

お前らを、絶対に殺してやる！！！！！！！！！！！」

足元で瓦礫が弾ける。
それと同時に風が吹き、アインスの前に俺が現れる。
そのまま右手で殴り飛ばすつもりだったが、雷の剣で弾かれる。そのまま切り下げようとするので、
風を逆噴射させて後方に避ける。

その隙に、剣が振り切られた瞬間を狙ってまたその脳漿（のうしょう）をぶちまけたかったのだが、

「ああ！！！？　帰還命令？　バカ言ってんじゃねーよ！
アイツだよ。あの御神だ！　生きてやがったんだよ！！」

誰と話しているか分からないが、何か通信機のようなものをつけたまま話し続けるアインス。
その隙に拳を当てようとするが、避けられ、離れられる。

「ちッ！　これからが楽しいトコなのになぁ！　命拾いしたと思っとけよ御神！！！！」

後ろを向き、そして周りに電気が生じる。
と同時に、その電磁力を使って一瞬でこの場を去った。

俺は、ただ逃したということだけ、頭の中にあった。

コロシソコネタ。

『おい。平静になれ』

「……分かってる……！！！！」

次会った時は、殺してやる。

それこそ、逃がす間も無く、痛めつけて苦しませて殺してやる。

第三話　製造番号《アインス》（後書き）

あっさり終わった。
次いつか書く戦闘は濃くする。

第四話　情報収集《ファーストセクション》（前書き）

情報収集と書いて、きょうはくと読む。

第四話　情報収集《ファーストセクション》

『で、どうすんだよ？』

何故こうなった……。

ため息を吐いた後、改めて現状を確認するために前を向く。
そこにはむさくるしい男ども。
数は数えるまでも無く、十一人、といったところか。
そして誰もが、その顔に久しぶりの獲物にありつけたと言わんばかりの狂喜の表情を貼り付ける。

見覚えがある、表情。

忌まわしき、俺の能力が現れてしまった事件。
裏路地の暗闇に映る一つの顔。
記憶が未だ鮮明に残っている。……忘れたいのに限って、忘れられないもんだな。

「お前ら、能力者か？」

すると俺のその質問に、答えるのも面倒そうに言う男。
恐らくリーダー級。……こいつ等が徒党を組んでいた場合の話だが。

「当たり前の事聞くんじゃね～よ。
こんなトコにいる奴なんざ、能力者か軍連中でも無けれゃオツムでもイカれてるっての」

その言葉で一斉に笑い出す男達。
だが甘い。この制服で分からないのだろうか？
別に、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』だからって、それ以外の人を差別するでも区別するでも無い。
でも少しぐらい気付けば、こんな面倒な事で時間ロスするなんて無かったのに……。
早く『ＨＵＭＡＮ』の居所を掴まないと……紫達に会わせる顔も無い。
「そこを通してもらう。情報を置いていけば、命は確実に保障してやるよ」
「ああ！？　クソが、いきがってんじゃねーよ！！」
一人の男が遂にキレて、こちらに走りながらも手をかざす。
その手のひらから火が迸り、やがてそれは矢となり飛んでくる。
だが、その速さはとてつもない。
矢の形は伊達じゃなさそうだ……。
……さしずめ『炎熱弓矢（ヒートアロウ）』か。
だがまだ未熟。能力の発動方法からして、多分矢の形でしか保てないのだろう。
「能力発動。対象、飛翔物」

だが、『祖体』には、炎も含まれる。

「なっ！！！？」

驚愕の声を挙げる男。
炎は、俺に触れた瞬間に制御し、形を球に強制変換。そして空中待機させている。

「行け」

別に声が無くとも良いのだが、雰囲気というのもあるだろ？

炎の球は、それを撃ってきた本人に向かい、その足元で爆発した。
その衝撃で男は吹き飛び、そのまま倒れて動かなくなった。多分気絶でもしたんだろう。

「さ、もう一度言う。さっさと情報をくれれば見逃す」

こういう輩には、下手に出ては駄目なものなのだ。最初からこのように強気でかからないと、
後で裏を掻かれて失敗する。

男達は一瞬、気絶している男を向きながらも、再びこちらを向いて笑う。

そしてそのまま、九人一斉にこちらに走ってきて、それぞれが別々

の能力を使ってきた。

「おらぁ！　死ねッ！！！」

後ろから岩石が飛んでくるのが分かった。
そのまま横に跳び、岩石が地面に陥没するのを横目で見ながら、そのまま一人の男の懐に入り、
右手の機械の拳で、その腹を打ち抜き、そして再び走り去る。

火、水、電気。
さまざまな、当に能力の応酬が続く。

真正面から水の弾丸が飛んでくれば、能力を使って跳ね返す。
右から火が来た。

それを避けながらも、能力を使って、人間では出せないような速さで跳ぶ。

「クソッ！　何なんだよコイツ！！」

「人間じゃねええ！！」

男達の焦り声を聞き流しながら、俺は情報を集めるため、
動きを絶やさずそのまま倒していった。

第四話　情報収集《ファーストセクション》（後書き）

「え～。今回は俺一人だ」

「作者のバカは、どうやら風邪気味らしいな。
朝起きたらノドと鼻が誤爆してたらしい」

「……一人だと何か物足りないが、……これからもよろしく」

主人公紹介（前書き）

無難に行きますよ。無難に……

主人公紹介

御神・哀　　ミカミ・アイ

性別・男だと思う。ってか男

髪色・黒。長い。肩にかかる程度

目色・勿論黒。だって生粋の日本人だもの

容姿・黒い長髪に黒い目。そのままの生粋の日本人。
　顔は上に分類され、本人はその女々しい顔をなにかと不便がっている
　が、別に特に気にして無い。

好きなもの・紫
　仲間
　それらと居る時間
　……義妹
　珈琲
　総隊長、並びにそのような雰囲気を持つ人（尊敬）

嫌いなもの・ＨＣ－Ｒを含む、自分に仇名す敵
　上手に出まくるふざけた人間
　人の話を聞かない人間。
　好きなもの・大切なものを傷つけるもの

性格・意外とお調子者だったりするが、
ある特定の事柄に対しては真剣になり、驚くべき集中力と精神力を見せる。
恋愛に対しては一途。勿論相手は紫。
しかし、それと同時に仲間の事も大切に思っており、それらを守るためならいくらでも何でもする。

現時点能力・能力『祖体制御（マテリアルコントロール）』
全ての『モノ』を、原子レベルで『分解』・『操作』できる。
操作できるモノは一度に種類が限られる。
だが、複数の物質が混ざっていても操作できる時もある。

制限質量不明。半悪魔に成ったせいで体のスペックが上がったから。
制御下に置くには、自分の皮膚か、身に着けている物に触れている
事が最重要条件であり、それを満たさなければ物体は操作できない。
だが、同じ物質なら、接触していれば遠隔操作も可能。
例・自分⇒手元の空気⇒遠距離の空気

魔法・魔術
半悪魔化したのだが、『半』なので魔法・魔術。それ

ぞれ人間・悪魔が使う術式が同時使用可能。
しかし、元々相反するものなので、同時使用は厳禁。
『魔法』を使えば、悪魔の片割れが拒否反応を起こし、
『魔術』を使えば、人間の片割れが拒否反応を起こす。
精神は、人間・悪魔両方が共生しているが、入れ替わる事も可能。
しかし、その上での戦闘は、身体に多大な影響と負荷を与える。

『魔法』

火・水・風・土

闇・光

天・魔

だが、よく使うのは、一番使い勝手の良い強化魔法である。
これは、自身の魔力を身体に付与、浸透させながら行動するものである。

例・『外的強化・全身』『水の精霊、我に答えよ『ストーミング・ランス』』

『魔術』

名前・呼称には各自悪魔の名前がついていて、その悪魔の『力』を一時的に謙譲させて使う。
これは、使い主の悪魔より下の階級の悪魔のものしか

使えない。

だが、ある人に、アイの悪魔ｖｅｒは、ほぼ全ての悪魔の力を使える……と言われたらしい。

例・『アスタロトの視権』

……なんでこんな事（チート）に……

主人公紹介（後書き）

「ふッ！！！」

ドゴッ！！

「がっ！？　何しやがる！　俺が作ったキャラのくせに！」

「うるせええ！　チートだ、最強だ、なんてもう聞き飽きた！
テメエが調子乗って能力追加しまくんのが原因だろうが！！」

「あ、いやでもさ……」

「問答無用！！」

「え？　あ、ちょッ！　や、ヤメ……！！」

第五話　天国情報《トゥルーアンドフォルス》

さて、そろそろ先に進まないとな。
もう太陽も頭の上。どこか一番近い街で、今がどの時期で、『ＨＥＡＶＥＮ』はどうなっているかも聞かないと。
と、やはり瓦礫を踏みしめて歩こうとするのだが……

「う……いてええええ……」

「あああ……」

「誰か…たすけてぇ」

……ものすごい罪悪感。

罪悪感？　何それそんなの持ってたんだ。って言う人いると思うけどさ、持ってるからな！？
まったく、後ろであんなあからさまに呻(うめ)かれたら助けるしかないだろ。
自分で言ってもお人よし過ぎだろ、俺って。

〜治療中。少々お待ちください〜

大体は手加減して、気絶しない程度にやっただけなので、
俺の能力を使って傷ぐらいは塞げた。
でもさ、次の問題が出たんだよな。面倒だよ……。

『ありがとうございます！！！！！』

……何このボス的存在な俺。

「あ～、何だ？　別に良いって」

『いえ！　このご恩、一生掛けてお返しします！！』

……この揃い様。なにこれ怖い。
とまあ、そんな感じで、結局折れたよ。

俺がだよ！！！！！

「で、街どこよ？」

歩きながら、後ろに十人ほど連れて問う。

「ああ。この跡地から一番近いのは……」

答える男が、地平線の彼方を指して答える。
その先には、街のようなものが見える。

「あれです」

結構近いな。こちらに戻って来たばかりの時は見えなかったからな。
でも待てよ？

少し疑問が引っかかる。
俺は、その疑問を解消するために、男の一人に聞いてみた。

「なあ、跡地って？」

その男が、「何で知らないんだろう？」といった顔をしたあと、
答えたその言葉が、俺は信じられなかった。いや、予想はしていたが、やはりショックだった。

「跡地って言ったら、アレですよ。三年前の事件で崩壊した『ＨＥＡＶＥＮ』の、で――――」

「何だとッッ！！！？？？」

つい掴みかかっていた。
その男が苦しそうにしているのを見て、冷静さを取り戻そうとする。

「はぁ……すまなかったな。で、話しを続けてくれ」

「は、はい。
それで、……」

そこから聞かされた内容は、驚愕のもので、同時に嘘と欺瞞に満ち溢れていた。

曰く、『ＨＥＡＶＥＮ』は、世界を能力者のみで統一しようとする

組織。
表向きは、人間との共存が目的と言い張っているが、実際露呈したのは、
……『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の戦力強化による軍備の統一。
そして、人口的に能力者を作り出す研究を進めていた、総隊長の無骸零。

最初は、人間軍からの、膠着状態による発砲。
能力者と言っても、所詮人間。一人の能力者の死によって、部隊内の反人間派が突撃。

そこから戦争が激化。

度重なる、人間軍からの攻撃にさらされ、遂に能力者達は、虐殺事件のあった跡地から退き、
新たな場所に街を作っている……らしい。

……この話しから推測するに、１００％、裏で『ＨＵＭＡＮ』が動いている。
そして、多分戦争の詳細は知らないが、その引き金を引いたのも、

「ＨＣ－Ｒ」

「え？　何ですか？」

「あ、いや、なんでもないさ。さ、さっさと行こう」

さて、どうするか……。

この緊迫した状況の中でも、
昼空に舞う鳥達は優雅にその美しい声を披露していた……。

第六話　門前驚愕《サプライズゲート》

「へえ、此処がそうなのか……」

見上げるは、大きな壁。
いや、正しく言えば、門。それは、全体を優に１０メートルは超えているであろう門だった。
勿論、鉄製の頑丈な門。

ところどころ焼け焦げた後があるのは気になるが、それでもその門はビクともしなかったろう。
それほどまでに大きく感じられた。

「はい。ここが新しい『ＨＥＡＶＥＮ』らしいです。
何でも、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の生き残りが、仲間を集めてまた人類共存を目指してるらしいですけど」

「お前達はどうなんだ？」

「俺達は……どちらかと言えば、あまり信じれないんですけどね……。
だから、飯とかはここで食いますけど、ずっと外にいるんですから」

……やはり、『ＨＥＡＶＥＮ』に在籍していただけの一般能力者には、事実は伝えていないらしい。
甘い。と言いたいが、仕方の無いことなのだろう。

そのまま、未だ俺を兄貴と呼んでいる奴らを後ろに引き連れ、
門の横にある警備用の小さい扉を開こうとしたら、呼び止められた。

「あ！　兄貴、そのままで良いんですか！？」

「そのまま？」

見れば、今更だが皆が顔を縦に振って頷いている。
っていうか何のことだ？

……

……

……あ、そっか。多分、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の制服着てるからか。
こいつ等は気にして無いみたいだけど、流石に警備の奴には止められるよな。
面倒事は避けたいし、脱ぐか。

そのまま、納得したので黒い迷彩服の上を脱ごうとしたら……

「あ、兄貴？　何か妙に兄貴が色っぽ「死ね！！」うげやあああああ！！！！！！？？」

変な趣味に目覚めんな！　気持ち悪ぃんだよ！！

そのまま、制服の下に来てたＹシャツと、下は黒いスラックスだけになった。
だってこれしかないんだもの。しょうがない。

現在、所持服……最後なファンタジーに出てくる某雲さんの灰色バージョン。（こっちじゃコスプレだよね）

『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の制服。（下に着るはＹシャツ）

予備用の黒いスラックス。

……以上。

義父さん。黒いスラックス感謝する。

「よし、行くか」

「グスッ……は、はい」

未だに女々しく泣いてる奴を後ろに引きながら……扉をノックした。

コンコン

「はい？」

「あ、すみませ……」

「は……？？　……」

「「……なんで？」」

……おいおいマジかよ。

第六話　門前驚愕《サプライズゲート》（後書き）

「はははは！！　八十行だぜ！！？」

「少ないんだよこのボケ！　カス！」

「おいおい。何を言ってるんだ。私はただ忙しいから……「だから問答無用だっつの！！」うぎゃああ？！」

「え～～……少なすぎ、作者に代わり、俺が謝罪します。……すみませんでした。ミカミです」

さて、ここで問題が出た。

……二月いっぱい、用事がある。何と外国にステイするのだ。

そして用意されたライフカード。

『予約投稿一ヶ月分』『ＮＰＣ買い』『休載』

……作者的に一番楽なのは休載。

だけど、それはやりたくないなぁ……。

さて、どうする？

第七話　御神侵入《バックホーム》

???SIDE

「あ！！　そんな……お前……ッ！！」

何でだ！？　何でコイツが目の前にいる！？
つい、暇つぶしで門番をしていたことにも忘れ、目を見開き、ソイツの顔を確かめる。

黒い肩にかかる程度の髪。
女のような容姿。

それは、奇しくも俺達が、生きていると信じていた奴の顔と同じだった。

あの、時。炎がアイツを包んだ瞬間、多分俺と同じ系統だと思うが、能力であろう光が部屋を包んだのだ。
そして、燃えカスの服の欠片だけを残して消え去った。
……その光を見たのは俺達だけだし、それに俺自身だってあの時の記憶なんて確かなもんじゃない。

だけど、信じていた。
信じていたソイツの容姿を持った男が、目の前にいた。

だが、何でここに……？？

「あ～、この街に入りたいんだけどさ、良いか？」

その言葉に意識が戻される。
思考が吹き飛び、現実だけを見る。
その男は、右手に手袋をしていて、何だか何処かの学生みたいな格好をしていた。
このご時世、ここ新生『ＨＥＡＶＥＮ』に学校などまだ出来ていないのだが。

「あ、そうですか。では、こちらに来て検査を……」

闇雲すぎたか。
そんな訳無い。

そう自分自身に納得させて、淡々と仕事をこなすことにする。
ここに来たのなら、能力者なのだろう。

ここを通ったのは見たことがない人だ。

勿論、二度、通りでもしたら絶対に見逃さなかったが。

「あ、はい。能力の検査ですか？　俺ここに来たの初めてなんですけど？」

「こちらの指示に従ってくれれば幸いです。では、奥に向かって下さい」

そのまま、敵意も害意も無いらしいので、扉を通し、
能力検査を受けさせた。

～門内簡易検査場～

「ほっ」

その男が手を振ると、その動きに合わせて風が動き、そして目の前にある岩を両断する。
時には風が固形化し、剣となったりもした。

「……『風向制御（エアリアル）』の一種か。
検査終了です。今検査で、貴方は晴れて『ＨＥＡＶＥＮ』に自由に出入りできます。
……ご協力ありがとうございました」

慣れない丁寧語を使いながら、男に向かって見送りをする。

目の前で開く扉の先には、見慣れた商店街が広がって、
今や、昔の五分の一まで増えた人口の一部がひしめいているのが見える。

そして、そこを先に進もうと扉をくぐろうとしている、男。
連れの奴らは、いっつも頻繁に出入りしている奴らだ。何か関係があるのだろうかと思いながら、

そこから背を向けたその時、

後ろから声が聞こえた。

「よ、強くなってんな。聊爾」

「――――――ッッッ！！？」

後ろを再度向いた時、既にソイツは人ごみに紛れ、姿を消していた。

「御神……哀……」

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

「……良かったんですか兄貴？　アイツ、古い友達とかじゃないんでしたっけ？」

「良いんだよ。今無駄に姿見せたって、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』が混乱するだけだ。
それに、俺が居た場所見たか？　人間達、また攻めてくるつもりだな。

そんな時にてんやわんやさせちゃ、ならねーよな……」

「はぁ、色々考えてるんですね兄貴」

「ま、そんなもんだろ」

ま、実際は……泣いちまうし、もう少し覚悟を決めてからじゃないと、

中途半端に帰ったって、……こっちが足手まといになるだけだしな。

今は顔見せだけで良いだろ。

第八話　方針決定《ルール》

「さてと、……食うか？」

『イィッヤホォォーーイ！！』

さてさて、そこらへんで拝借した金（別に悪くないよ！）を見せ付けながら、言う。

……こういうのも悪くないなぁ……不良の頭みたいな？

俺達は、近くにあったファミレスに足を運んだ。

……

……

……

「……じゅ、十二名でよろしいですね……？？」

「ああ。広いトコよろしくな」

「か、かしこまりました……」

案内された席に座る。他の奴らも座った後、注文して、それぞれが思い思いの料理を食べる。

……って、オイ！　そこのお前、何でステーキ食っちゃってんだよ！！

「兄貴……」

「ん？」

口に広がる肉汁を楽しみながら、一人から問いに返答する。

「俺達ゃ、これからどうするんですか？
元々、俺達には住む場所なんてモンありませんから、何処へでも着いていきますよ」

そうだなぁ……。

あ、そういえばコイツらって……あ、巻き込めないよな。
でも、絶対着いて来るって言い張るだろうしな。

「……お前ら、全員能力者なんだよな？」

「え？　あ、はい、そうですけど。
おい、お前ら！」

その後、皆から能力に関しての説明を受けた。
どうやら、やはり鍛錬不足だな。もし攻め込まれたら……絶対に生き残れるぐらいにはしておくか。

「よし、これからの方針を言うよ。

「これからは……

……

……

「おらおら！！　だらしないぞお前ら！」

目の前でへばっている男達。どいつもこいつも、無駄に体力が少なすぎる。

よくこんなので能力を使えたな。

だが、これから俺に着いて来させるには、もっと訓練……もとい調練を厳しくするしかない。

「まずは筋トレによる体力づくり！

そうしないと持ってる能力だって、威力を発揮できずに宝の持ち腐れだ！」

『は、はい！！！』

「っしゃァ！　次は街、十週して来い！　一周に三時間かけんな！」

『は、はぃぃ！！？』

少し狼狽しながらも、しっかりと俺の指示を聞いてくれる。

……我慢してくれ。

これも、お前らを死なせないためのものだからな。

誰であろうが、俺は絶対に目の前で人は殺させない。

甘い考えかもしれないが、これだけは曲げられない！！！

これが俺の信条だ。反省も後悔もしない。

……反省はしよっかなぁ……？

第八話　方針決定《ルール》（後書き）

投稿日にはやっつけ仕事だったので、チョイ追加。
それでも少ないこの（ｒｙ

作者の早速な適当仕事について……

タイトルどおり。第八話が適当すぎて、区切りも何か変だったから、それだけ改稿しました。

ま、まあ、それといって変化は見られませんが。

それでも、昔、改稿しても最新話として表示されないと聞いたので、今回こんなのやってみました。

改稿部分、ちゃんと読んでください。

「ま、それといって何も無いけどな。読んでも問題ないぞ？むしろお前、今日の仕事から逃げただけだろ」

……では、よろしくお願いします。

「あ、逃げやがった」

うるさいうるさいうるさぁーーい！

第九話　調練仕度《トレーニングスタート》（前書き）

今回はあの名言を。

第九話　調練仕度《トレーニングスタート》

「ははははは！！　見ろ。人がゴミのようだ！！！」

『ゴミって言うなぁ！！！』

ああ、良い返事だな。まだまだ元気そうだし？
もうちょっと厳しくしても良いのかね。

『すみません勘弁してください』

まさかの以心伝心！？
お前らの中にあの伝説のロープレ系の念話ができるやつがいると言うのか！？

「あ、兄貴ィ……も、もう無理っす……」

アレ？　アイツ……じゃなかった。そうそう。

「はいはい。もう少ししたら、新しい洋服買ってあげるから、我慢しましょうね～。
勿論、庸丈もともかく、お前ら全員な」

『マジですかぁ？！』

お、おお？　何かここらへん一体の根性ゲージがレベルアップしたような……？？

庸丈というのは、この仲間十一人の元・リーダー格っぽい奴。

こいつ等は、意外と身だしなみを整えたら普通の奴で、歳を聞いたらななな、何と、俺と同じらしい。
それで高校生かー。老けてんね。

それはともかく、とりあえず庸丈（ようじょう）　丈（たけし）。コイツから皆に話し通すようにした。
それで、これからの予定として、……

その一。格好よく、『Ｕｎｉｎｓｔａｌｌ』のいる戦場に突入。そして大活躍しながらも、感動の再会。
その二。格好よく、一部隊として活躍……する予定。

それまでに、俺も覚悟決めて、男らしくしないとなぁ。
……いざここまで来たっていうのに、何で素直に会いに行けないんだろうな……。

それはともかく（二回目）、コイツらは、多分俺が戻れたら絶対に部隊にする。
これ、決定事項。

そのためにも、戦場で生き残るためにも、能力を磨いてあげてる途中。

「まずは君！　名前は！？」

「あ！？　は、はい。俺は椙軒（すぎのき）　鼎（かなえ）です。
能力は、『人口奇跡（ネバーエンド）』です」

へえ。あんな、会った時にニヤニヤしてた柄悪い奴らの中にも、こういう奴いるのね。
所謂、つまり、ともかく、言えることは……イケメンってこと。

「『人口奇跡』？　どういうのなのそれ？」

「俺が能力を発動していれば、
勝手に周りの敵が自滅してくれたり、味方に有利な状況になったりするってことです。
もちろん、能力で捻じ曲げられないほどの相手もいましたけど……」

「うーーん……それは鍛えようがないよなぁ……。
でもな……もし…そうだな……。

よし、決めた！　君、精神力鍛えなさい」

俺のいきなりの提案にうろたえる鼎。
無理もないだろう。精神力とか言っても、そんなの簡単に鍛えれるものじゃないし。

「せめてこのなかに精神攻撃系の奴がいたらね」

その自分自身で発した言葉で、佐屋姉弟が思い出される。
懐かしいな……紫のはだk……ゲフンゲフン。

しかし、俺の予想に反して、その言葉に反応する奴がいた。
いや、正確には鼎も含めた全員がある一人に視線を向けていたのだ。

「ミーがやるんですか？」

「そ。ユーがやるの」

おっと、ついノリで返してしまったぜ。
だが、能力の詳細が分からないとどうにもならないな。

「お前、名前と能力の詳細」

「ミーはミー。それ以上でもそれ以下でもないね。
能力は『阻害伝播（ソリッドジャミング）』。……受けてみれば分かるね」

……何なんだこのノリは。
というか何故に四番目さん！？

……というのはどうでも良い。

「とりあえず、受けてみるか」

「ええッ！？　あ、兄貴！　止めてくださいよ！」

「そ、そうですよ！！　俺だってそれは奇跡で止めれません！！！」

『頼みますからそれだけは勘弁してください兄貴！！！』

……なんだコレ。
でもさ、やっぱり、受けるなと言われれば、引き下がれないのもまた男なのよね。

「よし。ユー、やれ」

「いえっさー♪　ひさしぶりに使うよ」

と、ユーの手が俺の肩に触れる。

ぽん、

と。するとその瞬間。

「うぶはァッッ？！？！」

な……なんじゃこれはぁぁぁぁ！？？？

第九話　調練仕度《トレーニングスタート》（後書き）

哀は何を見たのか？
次回をお楽しみに！

「あんなもん見せるなぁぁぁあ！！！」

良いじゃん。役得じゃん。

第十話　礼装購入《ブラックスーツ》

「……もう良そうぜ」

「お、おい！　兄貴！　目が逝っちまってるぞ！！
お、おおい。ユー！　止めろ！！！」

「ええ～……けど仕方ないね。ミー止めるよ」

……死ぬかと思った……だが、これなら……

ってか阻害って、そういう意味ね。
ヤバイな。理性の咎めが阻害されそうになっちまったよ。

それにしても……紫、えｒ「兄貴！　大丈夫ですか！？」

「あ？　あ、ああ。それにしても……スゴイな。
お前ら、全員ユーのコレ受けたのか？」

「え、ええ。一度は全員。アレはある意味苦痛でしたよ」

やっぱりそうなのな。
だってこのグループ、女ッ気ないし。
……もうよそう。何も考えない方が良いな。

「さてぇ！！！　注目！
これから街に戻って、スーツ買いまーす！！」

俺の言葉にザワザワと聞こえる声。
ま、驚くのも無理は無い。見たトコ、コイツらは服なんてあんま持ってないでしょ。
っていうか、安宿泊まり、または野宿で飯は街って、今思うとなんて苦労をしてきたんだよ。

「やっぱり俺たちには何か分かりやすい共通点が必要かななんて思ってさ。
だから、いっちょ某イタリアマフィアっぽく黒スーツで決めようぜ！！！」

「某イタリアマフィアって何ですか？」

……庸丈、そこは突っ込むな。

「そんなもん気にするなああ！！
お前らは、格好良い黒スーツ、欲しいかあああああああああぁぁぁぁぁ！！！！！」

『ウオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！』

「勿論、黒一色で、ネクタイ付きだあああぁぁぁぁ！！！」

『ウオオオオオオオオ！！！！！！！！！』

「勿論、Ｙシャツまで買ってやるうううぅぅぅ！！！！！！」

『ウオオオオアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！』

「さあ、街に行こう！　採寸しなきゃだからな」

『イエス！　マイロード！！』

ははは。このノリ……何？

俺、キャラ壊れかけか？

まったくさ、高校生ク〇ズ選手権じゃないんだから。

で、そんなこんなで盛り上がりながら、既に聊爾じゃなくなってる街の門兵にドン引きされながらも、俺たちはこのノリのまま行った。

金？　勿論ありますよ。お忘れですか？　黒いクレジットカードは、未だ健在ですわよ。

……わよ？

「あ、兄貴！　これですか！！」

「ああ。そうだ。予め予約で形だけ作っといて貰った奴だ。それぞれ、採寸ぐらい自分でして、後で戻って来い」

『ありがとうございます！！』

目の前にある黒い葬式用みたいなスーツ。
そして会計……

「はぁ……」

「十二点で、合計３６９４５００円です。
ご来店ありがとうございました♪」

♪いらねえだろ。

まあ、お高いですわねレベルじゃねーぞオイ！！

店員さんによると、今は人間側からの補給などほぼできない状態なので、
布でさえとても高く、ましてやそれを作る技術者たちも……

っていう状態。

よし、俺がどーにかしよ、絶対。
だってお高いんだもの。

第十一話　戦場突入《ヘルプユー》（前書き）

投稿が滞っていた理由は……活動報告をどうぞ。
いや、すみませんでした。

第十一話　戦場突入《ヘルプユー》

黒煙が見える。
きっと、この立ち位置……街の内部。開きっぱなしである門の前から、
ほんの数百メートル先は、最前線。

偽の情報に流されている人間軍と、それを殺さずに対応している能力者軍が、
それぞれ兵器と能力をぶつけあっているはず。

対能力者用の兵器というのも中々に興味が湧いたが、今はそんな暇は無さそうだ。

「兄貴。俺たち……あそこに行くんすか？」

一人が不安そうにそう言う。
それはそうだろう。俺だって、多分まだ高一、二程度だし、コイツらだって、実際年齢俺とほぼ変わらないのだ。
いくら能力者であろうとも、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』に居なかったならば不安がるのは当然。
ましてや、そこに突っ込んで、情勢をこちらの優勢に傾けさせるのだ。

「そうだ。だが……もし、自身の能力に不安を感じたり、
身体に不調、または異変を感じたりしたら、勝手に退場してくれて構わない。
俺は、別に去った者は咎めないし、また来てくれても良い。
でも俺は……これからもこの戦場に突っ込む。

俺に一生着いて来たいなら、今この戦場で着いて来い」

『……』

「集団心理で動くなら死ぬだけだ。ちゃんと個人の意思で決めろ。冷たいように聞こえるかもしれないが、お前達を殺したくないからだからな？

俺は行く。返事は聞かない。

来なくとも俺はお前達を臆病者扱いしないし、いつも通りに接する。

じゃあ、だな」

後ろの何か言いたげにしている奴らをほっといて、俺は門を出る。

勿論、門兵に何事かと問われるが、沈黙を突き通す。

切り捨てる。現時点で自分より後ろにいる味方を認識しない。

これより、敵のみに集中する。

何人来ているが知らないが、それぞれが生き残るしかない。

ゆっくり、けれど確実に、

最前線に向かって歩き、『ＨＥＡＶＥＮ』から百メートルほど離れた地点。

唐突に、

「兄貴。俺ら、どこまでも着いていきますよ」

そんな声が聞こえた。

目尻が少し熱くなるのを感じながら、
背中を任せたとだけ、言う。

右足で踏み切る。

制御するは……馴染みの大気。
創造するは翼。大気でできた、不可視の翼。だがその中には、暴風が吹き荒れている。

「行くぞおおおッッ！！！！！！」

『おおおおッッ！！！！！！！！！！！！！！！』

その掛け声とともに、宙に飛んだ。

幾多もの、銃火器を持つ人間兵と、
黒い迷彩服……つまりは『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の制服を着ている奴との間を高速ですり抜ける。

目の前を火花が散る。
それは能力の発火であったし、同時にアサルトライフルのものでもあった。

見えた……。

きっと皆は最前線に来ながら、途中で人間と戦っているだろう。
それで良いのだ。なぜならこちらには……

「これが対能力者用の兵器……かよ。滅茶苦茶だな」

機械だった。ただそれだけ。
機械の塊。

中身は複雑で、俺の右手など比べるまでも無く安っぽく感じるであろう機械が鎮座していそうな、
鋼鉄の銀色に輝く外骨格。

それは、言うなれば人だった。
だが、あきらかに大きさが違うそれは、通常の人間の二、三倍はあった。

これほどまでの兵器を、俺が居ない三年程度で完成させるほどの技術は、
この世界は持っていない。ならばどこか……？

答えは簡単。『ＨＵＭＡＮ』だ。
能力者に関する情報だってアイツらだろう。
もっとも、既に死んだ俺の情報が知れ渡っているか知らんが。

「やるか」

その機械の一体が、近くにいる黒い服着た相手と戦っていた。

アイツは……！！

いきなりだな。懐かしい奴に会ったじゃねーの。これで三人目だな。

アインス、聊爾、と来てこいつか。聊爾とは上手くやってんのかね。

戦場でいささか不謹慎だろうが、ついつい思い出に浸ってしまっていた。

気付けば、その味方の女は、歯軋りをしながら機械を睨みつけていた。

風に乗って音が流れてくる。

「ったく……忌々しいね。コイツら機械だから……久しぶりにやっていいのかね」

瞬間、

ドッ！！！！！！！！！！

轟音、爆音。

と同時に凄まじい熱気。

そしてふりゆくものは、岩石。しかし、人間には当たらないように調節されている。

その女の地中からは、どろどろとした、オレンジのような赤のような色を持った、

溶岩。

あいも変わらず馬鹿深い場所まで掘削していることで。

その溶岩に飲み込まれ、ところどころに黒い煤をつけながら……っていうか焦げて、溶けてるな。

「……相手が生身じゃなけりゃちょろいよ」

「よ。何か暇してんな。余裕ですかね？」

俺の後ろからの言葉に驚いたのだろうか、擬音語を出しそうな勢いで飛びのく。

そしてこちらを見る目は、段々と驚愕に色染まっていく。

「『大地噴火（ランドナパーム）』。不知火奏華。久しぶりだな」

第十二話　製造番号《フィーア》（前書き）

タイトルどおり。久々のあの女です。

第十二話　製造番号《フィーア》

「あ……哀……」

だが、久しぶりの再会に感動している暇は無い。
その言葉の続きも聞かず、俺はその場から見える機械二体に風の刃を放った。

「その言葉は後で。今は戦場に集中した方がいいと思うがな」

そしてそこから飛び立つ。

俺の風の刃は……効いてない。
流石、『対』能力者兵器と言ったもんだ。

鋼鉄でも細切れにする自信あったんだがな。

機械の巨人は、その腹や腕に軽い切り傷を付けているだけで、
後はどうどういうことも無く、動き続け、周りの能力者相手に機関銃を撃ったり、自らの拳を叩きつけたりしていた。

「これは止めないと……マズイな」

未だに動き続けている機械達と、それに乗じてこちらに走ってくる兵士を相手に、
岩石のみを操って足止めする不知火。
どうみても相性が悪いが、兵だって溶岩のおかげで動き自体、制限されている。

だからこそ、俺が言いたいのはそっちじゃ無い。

俺の視線の先。

銃火器を思い思いに持つ兵士達の奥。

『ＨＥＡＶＥＮ』陣営からでも、人間陣営からでもない方向から来る、軍。

いや、正しく言えば、それは人間の軍ではない。

強いて言えば、……何ともふぁんたじぃな、由々しき事態だが、

「またお出ましかよ。ＨＣ－Ｒさんよォ！！！」

目の前に広がる敵を、まとめて軽く、全力は込めずに突風で吹き返す。

一瞬だけ、目の前を広がる虚構を突き抜け、一つの影が土ぼこりを巻き上げる。

――――来たか？

と、思考を変えた瞬間には既にもう、

その影は目と鼻の先にいた。

「ああ？　何だよこのクソが！！　まっさかあのふざけた複製野郎の言う通りだってか！？

ま、私にはカンケー無いけどさ！！！！！」

「……フィーアか。

くッ！　く……クク……く、くはッ！　ははははハハはハはははは！！！！！！！！」

面白い。ふざけ過ぎて面白すぎて、笑いが止まらない！！！

「何だよお前。狂った？　どうでも良いけど、さっさと確保させろよ？

私だって早く帰りたいんだよ」

フィーアは、俺の記憶通り、その口の悪さと汚さを披露してくれている。

対して俺は……

嬉しかったよ。

感動の再会とでも言うのかな？

アインスの時もそうだったけど、嬉しいな純粋に。

だって考えてもみろ。

向こうで、一日も忘れずに、

憎悪と憤怒をぶつけてあげた、その張本人が、

二人も、すぐに会いに来てくれたんだ！！　最早運命ってか！？

「ふッ！　はあはははは！！　ふ……くっ、くく。ぷっ！

……くく、気分が良いな。

なあフィーア、テメエ、今まで何回死んだ？」

どうやら俺の質問が頭にキタようで、端正に作りこまれた顔が、醜く歪む。

「御神、お前……調子乗ってんじゃねーよこの屑が！！
私をあの複製と一緒にすんじゃねぇえ！！」

一瞬。一瞬だ。
その刹那の時で、俺の手は、掴む。
その獲物（フィーア）の細い首を。
そして言ってやる。忌々しげに、心を込めて。
「そうか、なら良かった。
……これでお前を最初に殺せる人間に、なれるんだな」

第十三話　油断大敵《ミステイク》

これでやっと殺せる……！！

そう思っていたのも、浅はかだったな。

油断していた。

コイツは、あの事件の時に聊爾を半殺しにした張本人だ。

直接触れて発動する能力に、キーワードは『骨』。

しくったな。

そう思っていた瞬間に、俺の腕の骨は、ヒビが入っていた……と思う。

「ぐっ！？」

左腕に激痛が走る。最初っから右腕で掴めば良かったものを。

逃がしたか。

「あーらら。随分と頑丈な骨してんじゃねーよ。

私、一応その腐ったスカスカの骨をボキッと逝っちゃうつもりだったのにさ」

俺の目の前に体勢を立て直して、こちらにゆっくりと手を伸ばす。

勿論、俺だって黙って立っていた訳では無い。

ゆっくりと手を横薙ぎに振りながらも、大気を圧縮。

そして相手の腹のど真ん中にブチ当てる――――

ドッッッ！！！！！！！！！

もの凄い、Ｃ４と同等程度の爆音が、戦場に鳴り響く。
空気が渦を巻いて、周りの土ぼこりを空中にあげながらも、その挙動を止めようとしない。

そして、それと同時に、その動きに巻き込まれて、
俺の予想通り、フィーアは吹き飛んだ。……まるで塵屑だ。

数十メートル先の地面が抉れる。
そして、半分めり込んだ状態のまま、地面がまた数メートル抉れていく。

しばらくそれが続いた後、風の動きは止まり、土埃も舞うのを止めた。

「ナイスショットッッってか？」

また翼を構成し、飛ぶ。
その地面の抉れが止まっている場所めがけて、飛び、着地。
地面に倒れ伏すフィーアを見下ろす。

その、あの事件のときと同じ服は、またしてもボロボロ。

「ったくさあああ……」

「ああ　ぇ？」

何だよ。しぶといなぁ、オイ。

「だからこの服、お気に入りって言ってんだだろーがあああぁぁぁぁ！！！！！！！！」

ゴッッ！！！！！！！！

鈍い音が響く。

それは勿論、骨と骨が皮膚をはさんでぶつかる音だ。

俺の肋骨に、フィーアの拳がめり込む。直撃だった。

だが――――――

またとない好機の訪れに、また少しだけ笑ってしまった。

ガシッと、フィーアの強烈にぶつかる拳の、手首を握る。

能力発動に一秒もかけねえ。

やはり手首は、次の瞬間、折れ曲がって、そして破裂した。

血が舞う。

血液が、その無数の血管を破ったおかげで、外気に噴出す。

静脈と呼ばれる大きな血管も、その例外に漏れないようだ。

ぶしゃっ！

素人目が見ても、軽く血が致死量以上出たであろう。

だがそれでも……

「いてーなぁぁあ！！！！！！！！！！」

もう一つあるフィーアの拳が、俺の頬に勢い良く当たり、

そして遂に俺はその場に立つこともままならず、地面に倒れ伏した。

「『噴骨再身（ボーンリミット）』。

油断大敵なんだよこの戦場じゃ。テメエだってまだまだ経験不足って訳だ。

ま、私は別に構わないけどさ。楽だし」

そしてフィーアはその手を俺の頭に――――

「じゃ、本物か知らないけど、さよならってことで。御神哀」

第十四話　死刑執行《スロウター》（前書き）

また哀が黒サイド（ダーク）に……。
そして表現が下品。
すみません、気分悪くしたらこちらの責任です。

第十四話　死刑執行《スロウター》

「ちッ！！」

いつの間にか、フィーアはまたも、俺から少し離れている。
少し覚悟している間にバックステップで何かを避けたように見えた。
実際に、フィーアは避けていた。
俺と同じように、触れるだけで攻撃となりえて、
それでいて俺とは違って、どんな強者でも防ぎようのない攻撃。

その攻撃を、フィーアにしようとした当の本人は、その黒い長髪をたなびかせ、
端正な顔をそのまま、無表情に押しとどめていた。

凛とした冷静な紅い目は、一種の懐かしさを俺に感じさせてくれた。
また、見えた。昔の光景。
蔑んだ目で見られても、その中から一人だけ、たった一人だけ救いの眼差しを向けてくれる、紅い目。

「アイ……こんなところで、何をしてるのかしら？」

「何って……お遊戯？」

瞬間、頭に衝撃。

「いたッッ！？　ってーなァ！！　何すんだよ！
ゆ……」
久しぶりに言うな。この名前、懐かしすぎる。
目の奥が熱くなるのを感じて、それを押しとどめようと我慢する。
「ただいま、紫」
「……おかえり、アイ」
しかし、やはり時と場所を考えましょう警報が発令されました。

「あーーあーーーー、現『ＨＥＡＶＥＮ』総隊長代理、それで特務隊隊長を兼任してる佐屋　紫。
それで一番謎な、死んだって記録のワイルドカード、私もよくしらねーんだよコイツらさ！！」

『そう言うな。それより、まさかこの通信聞かれてないだろうな？』
……フィーアはうんざりとした顔で、いつの間にか持っていた通信機と話している。
相手は……あの声、よく聞き取れない。
だが、俺、紫と、フィーアとの相性は互いに最悪だ。
それぞれが触れられた時点で必殺確定。だけど不意打ちなんてできる状況でもない。
「え？　ああ、聞かれてねーよ。もう戻って良い？　コイツらと戦

りたくねーよ。
私だって相討ち死とか勘弁だよ、ったくさぁ」

どうやら、能力の相性が悪いことも流石に考えるか。
だが、此処で逃がしたら――――もうチャンスが無くなるかもしれない！！！！！！！

「逃がすかぁあああああああ！！！！！！！！！！！！！」

「えっ！　アイ！？」

紫に見られているのも構わず、構成する。
こちらの世界には存在しないはずの、『闇』を。

体の一部分が黒く染まって……侵食されていく。

そして一瞬で体の大部分を黒く染めた、右腕が機械でできた歪な悪魔が出来上がった。

躊躇いなく、右腕で機関銃を撃つ。
弾はフィーアの足元に当たる。当然、アイツはバックステップをする。
だが甘い。

黒い粘液が、弾けた。

次の瞬間には、もう既に俺はフィーアを地面に叩きつけた！！！！

常人から見れば、まばたきする速さだったであろう。

「ぐぅッ！！！！！　こ、このクソヤロウがああああ！！！！！！」

能力を使っているが、所詮それもただの『能力』。
皮膚表面を覆う黒い膜のいくつかが破裂しただけで、本質には届かない。

「弱いな。弱すぎる。だがそれで良い。
俺が、俺が、俺が俺が俺が俺が俺がおれがおれがおれがおれがオレガオレガオレガ！！
お前ら『ＨＣ－Ｒ』を、駆逐して、淘汰して、虐殺してやるよ！！！！！！」

もう、力の加減も飽きた。
ふと、おもむろに空を見上げた。曇っている。

「ダメっ！！！　やっちゃ駄目よ、アイ！！！！！！！」

紫の声も聞こえる。
もっと話してからにした方が、良かったかな？

でも良いや。とりあえず、俺の目標の第一歩。

フィーアの抹殺。

また生き返るんだろうけど、どうでも良い。何度でも殺すまで。

「じゃあな。お前との殺し合い、楽しかったよ？」

「ぐ、ぐ……が……ぁ、ぁああ……」

そして声も出さずに、フィーアの頭と胴は、さよならしたようだった。

直前まで首を絞め、窒息していたので、

噂どおりの酷い死に方だった。

死体の力が緩み、体中から汚いものを出し続ける。

目は瞳孔が完全にタガがはずれたように開いて、半分白目を剥いている。

力を入れすぎちゃって、首が離れても涎って出るもんなのな。

だがそれ以上に、血の絨毯が辺りの瓦礫で出来た地面を這っていた。

ヤバイ。変な趣味に堕ちるかもな……。

「あ、あ、あ、アイ……貴方、なんてことを……」

何で？　何でそんな悲しそうな顔をするのさ。

弱い者は駆逐されて、虐殺されなきゃ駄目だし、そうじゃなきゃ俺の気がすまない。

皆を苦しめたコイツらを。

第十五話　怠慢時間《プリズン》（前書き）

別にブレイクしません。
なお、短い設定となっております。
いつも通り、この作品に見られがちな、
時間飛ばしすぎ端折りすぎの物語をどうぞ。

第十五話　怠慢時間《プリズン》

がちゃんと、鍵……頑丈で、どんな怪力男でさえこじ開けられないように思えてくる、
一本一本が太い鋼の棒で出来た、牢の鍵が閉まる。

閉められる。
誰かなんて、明白。勿論『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の奴らだ。

俺だって、いくら何でも『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』を奴ら呼ばわりしたくない。
だけど今の状況じゃ、イライラすることなんていっぱいあるんだし良いだろ。

壁に寄りかかっていたが、流石に寒くなってきたので、
ついさっき小さい格子窓から浴びせられる日向に向かう。
足元と手元でガチャガチャと迷惑で邪魔な低い金属音が聞こえる。
鎖が擦れる音だ。発生原因は俺に決まってるのに、どうしてもイライラしてくる。

日向に這いずって向かって、置いてある飯を食べる。

クソ不味いスープに、クソ不味い乾パン。ただそれだけ。

「暇だな。何で……こんなことになったんだろうかね」

『そりゃ『俺』よぉ、俺たちのせいに決まってんだろ。
勝手に相手殺したりしたらこっちの評判悪くなるだけなのにさ』

「うるせえ。俺はあの時ちょっとハイになってただけだ。もう二度とやらねーよ」

『そりゃどうだか。『俺』ってばよ、『ＨＣ－Ｒ』を相手にするたび、
笑って正気失くすもんだからなぁ、ははははっ――――

「うるさい」

こちらの世界に来てから、何かとうるさくなってきた『俺』との思考内会話を断線する。
最後に何か文句言ったみたいだが、知るかそんなの。

あのとき、フィーアを殺した時は、どうかしてた。

この黒い力は危険だ。どうせなら、精神（こころ）も一緒に『俺』に任せた方が良いかもしれない。
段々、段々と……半悪魔の体の人間部分が、悪魔に侵蝕されていく気がして収まらない。

殺した後、放心状態だったらしい（『俺』と、面会に来た丈、鼎に後日聞いた話だ）俺を素早く気絶、
淡々と迅速に部下に指示を出した総隊長代理……もとい紫は、一旦戦線を後退。
それと同時に人間軍も退却し始めた。お互い深追いしたら負けだと分かっているように。

痛むなぁ。
いや別に、心がとか言わないが、無性に痛い左腕。
高い金払って買い占めたのに、ボロボロになっている黒スーツを脱いだ時は、すげえ焦った。
左腕の付け根が、黒く変色してた。

前に言ってたな、自分でも、皆からも。
『魔術は言わずもがな。悪魔になった体には、魔法でさえ高い負担がかかる』って。
いわゆる『ハイリスク・ハイリターン』。
所詮悪魔と人間の半端者。大きな力を扱うには、それ相応の代償が必要。
魔法を使えば悪魔側に負担がかかり、
魔術を使えば人間側に負担がかかる。
能力と義手のみなら侵蝕を一時的にでも止められるが、
それだけでは勝てない。
戦争の裏に潜む『ＨＵＭＡＮ』と『ＨＣ－Ｒ』には。
……なんて小難しいこと考えても、解決策が見つかる訳でもない。

今は早く、紫に会いたい。
だって俺は、紫のために生きてるようなものだから……。
もし紫が居なくなるなら、俺は――――――

「御神哀、面会だ。
……総隊長代理、ご苦労様です」
牢の前にある扉が開けられる。
一瞬入ってくる蛍光灯の明るい光にくらくらしながらも、その姿を視認する。

「……やっと来たか。
久しぶりだな、紫」

牢の前まで降り注ぐわずかな太陽の光に照らされ、
その端正な顔を無表情で固めた、我が愛すべき人が現れた。……
…自分で言ってて恥ずかしいなオイ。

「久しぶりねアイ。
だけど、建前上そう呼べないの。今は御神哀と呼ばせてもらうわ」
どこかその呼び方によそよそしい雰囲気を感じなながら、
俺たちは話を始めた。

第十六話　帰還命令《クライ》

「まず、貴方は誰？」

不思議な質問に対して、内心とまどいながらも答える。

「勿論、御神哀。それ以外の何でもないさ」

「いいえ。それはありえない。史実、御神哀という能力者は灰になって消えたはずよ」

アイだって、そんな事言いたくないだろうに、
こうでもしなければ、他の奴らに訳が立たないのだろう。

考えてみてくもくれ。
実質、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』内でも、『ＨＵＭＡＮ』を知っていても、
その内部にある、『ＨＣ－Ｒ』について知らない人間は多い。はっきり言って、知っている方が少数派だ。

そして、そのような奴らが大部分をしめているこの世界で、伝えられている事は一つ。

『総隊長・無骸零が全ての元凶であり、もし奴が存在しなかったら、世界はここまで対立することはなかった』

だ。

そして更に多くの人間に知れ渡っている能力者。それが俺だ。

俺も総隊長も死んだこととなっている。
なのに、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』でトップクラスの能力者が、実は生きていましたなんて言えるはずもない。
戦争のきっかけとなった、反人間派の能力者達にとっては、良い火種。
人間との共存を思う能力者達にとっては、迷惑極まりない『悪』。

それなら仕方無い……か。

ため息を一つついた後、再び顔を上げ、前を見据える。

微々たる光が隙間からもれている無機質な扉の前で、
直立不動でこちらを見てくる紫。改めて見れば、少し大人っぽい容姿になって、
長い髪も少しばかり更に長くなっていたよう。

「その通り。紫達の知ってる『御神哀』は消えたよ」

「なら、……貴方は誰？　同じ答えは許さないわよ」

全く、流石紫だよ。久しぶりにあった身内（コイビト）にも
私情を挟まずに任務遂行する。
俺達仲間の中じゃ、コイツぐらいしかできない芸当だな。

「そうだな。……強いていうなら、悪魔で良いよ。
この戦いを終わらせに来――――

「ふざけないで！！！」

「……」

牢の冷たい壁に、声が反射する。ほぼ締め切られた部屋に、
紫の声がいつまでも響いて、頭に再生される。

「わ、私達は、ずっと、信じてたのよ！！
アイが、アイがきっと生きてるだろうって！！！」

「……」

「あの時、傍から見れば死んでたように見えたのかもしれない！！
だけどね、私達だけ見たのよ！！　あの光を！！！！
だから信じてたのよ！！　なのにどうしてアイ！　貴方は……！！」

ぽたりぽたり
と、床に雫が落ちる。雨漏りでも、ただの水でもない。
どこか温かみを感じることができる、涙が流れていた。

紫は、膝を床につけて、髪で隠れた目から、涙を流していた。
それは、俺に対する言葉を紡ぎながらも、ずっと流していた。
頬を流れ落ちる涙を拭きながら、紫は立ち上がった。
いつもの、優しい紅い目で俺を見つめてくれながら、言う。

「いつもの、昔の貴方なら……もっと強引にでも、気付かせてくれたはずよ？

アイ、良いのよ。無理をして、私を……！！」

チクショウ。何てこったよ。
今にも涙が零れ落ちそうな目で、紫を見つめ返す。

「俺は、……御神。御神哀だ！！！！
やっと、やっとだ！！　やっとお前に会うため、帰ったぞ」

『紫』。

まだ泣かない。
俺は、目の前で泣いてるコイツを、慰めてあげなきゃ、な。

第十七話　命令非守《ルールダウン》

「……」

「……兄貴……良いんですか？
もしかしたら、まだ間に合うかもしれないんですよ？」

……

……

「はぁ……。分かりました。皆に伝えてきます」

そう言い残して、俺から見て下側にいる丈（俺自身、瓦礫の上に座っている）は、
離れた場所で集まっている5人のもとへ行く。

結果、結局漫画みたいにご都合主義、とはならなかったよ。

紫を慰めて、その後すぐドカン。
いや、ドボン？

ま、いくら総隊長代理っつっても、まだ高校生。
頭の固い幹部連中の意見を曲げることができたり、偽装をすることができた。
なんてご都合進行無かったのさ。

今、再び俺は、戦場にいる。細かく言えば、ついこの前戦場と化していた、
『ＨＥＡＶＥＮ』の近くの瓦礫の山だ。
そこで、一つの煙を上げている。
俺の力で、負荷はかかるが無理矢理物質を強制変換。
勿論、察しがつくと思うが……そう。線香だ。
線香代わりのモドキと、街で買った花束をお一つ。
これじゃまるで事故現場に来た遺族みたいだな。……いや、家族か。
実際、コイツらとは会って一ヶ月も経ってるわけ無いのに、ずっと家族みたいに仲良くしてきた。
それで能力を鍛えてやったり、体そのものを鍛えてやったり、精神（メンタル）ボコボコにしたり。
色々な事をしてきた。
だけど、少し早かったかな。俺の責任だよ。
アイツらに、まだ戦場は早すぎた。
結局、命を残したのは６人。
椙軒（すぎのき）　鼎（かなえ）、庸丈（ようじょう）　丈（たけし）、白代（はくしろ）　城（じょう）、
ユー（ミー？　アイツの本名は謎だ）、御免通（おめどおし）　切捨（きりすて）、
山郷（やまさと）　嗣矢（つぐや）。
能力はそれぞれ、『人口奇跡（ネバーエンド）』『火計火車（ヒートラック）』、『嘘死魂魄（デッドオアデッド）』

『阻害伝播（ソリッドジャミング）』、『武志法率（サムライスピリッツ）』、『能業幾世（フィニッシュ）』

自分で決めてなんだか、途中途中で変なのがあるが、割愛。

コイツらの能力名は俺が決めた。（一部違うが）

俺自身、コイツらはそれぐらいの実力になってるって思ってるし、

思ってなきゃやってられない。

それほどの成長率だ。

戦場に介入してからまだ少しの期間しか経っていないが、まだまだ伸びるよ。

だから、もしこのまま一生、『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』に入れなかったとしても、

俺達は俺達で、この戦争を終わらせる。

それが『ＨＵＭＡＮ』の逆鱗に触れて、世界の人類全員が敵に回ろうとも。

「なあ、お前ら」

「兄貴！　もう大丈夫なんですか？」

「心配かけたな！　もう大丈夫だよ！　さて、街に戻るか！

お前ら、何か置いたか？」

置いたか、というのは勿論供え物。

家族の墓参りに供えるのは当たり前。

「はい。俺らは……」

チラッと後ろを向く庸丈。
それにつられて俺も簡易の、瓦礫の一部を使って作った墓を見ると
……
そこには千切れた黒い布が６つ。

……

「なら俺も」

俺は、機械の右手を軽く動かして、
丁度すぐ傍にあった黒い布を、ブチッと、少し千切り、それを墓の元に挟んだ。

「……戦場ってのは、人の命が軽く死ぬ場所だ。
だが、諦めるな！　俺達はまだ生きてる。だからこそ、できることもあるんだ、と考えろ！！」

「「「「「「はい！」」」」」」

「良い返事だ！よし、行くぞ！！　奢ってやる！」

途端、まるで後輩が先輩に飯を奢ってくれるような雰囲気になり、
それぞれがそれぞれ、喋り始める。

良い傾向。
このまま、時が進んだら、俺はきっとホムンクルスを殺すまで止まらない。
それで、……

死ぬかもな。

「兄貴、早く行きましょうよ！！」

「！　あ、ああ。分かってるよ」

能力者ー能力名　表形式（前書き）

これはただたんに、能力者と能力名をそれぞれ分かりやすく整理して羅列しただけです。詳しいことは本編で。あしからず。

能力者ー能力名　表形式

私設能力組織（名前はまだ無い）

御神（みかみ）　哀（あい）

『祖体制御（マテリアルコントロール）』

庸丈（ようじょう）　丈（たけし）

『火計火車（ヒートラック）』

椙軒（すぎのき）　鼎（かなえ）

『人口奇跡（ネバーエンド）』

白代（はくしろ）　城（じょう）

『嘘死魂魄（デッドオアデッド）』

ユーｏｒミー（名前はまだ無い）

『阻害伝播（ソリッドジャミング）』

御免通（おめどおし）　切捨（きりすて）
『武志法率（サムライスピリッツ）』

山郷（やまさと）　嗣矢（つぐや）
『能業幾世（フィニッシュ）』

『Ｕｎｉｎｓｔａｌｌ』

佐屋（さや）　紫（ゆかり）
『精神喰人（マインドイーター）』

荒祇（あらぎ）　聊爾（りょうじ）
『空間歪曲（ロストメビウス）』

涼風（すずかぜ）　琴雪（こゆき）
『絶対零度（アブソリュートゼロ）』

不知火（しらぬい）　奏華（そうか）

『大地噴火（ランドナパーム）』

佐屋（さや）　明（あきら）

『夢想破壊（シンキングストップ）』

飛騨（ひだ）　燃故（ねんか）

『直線狂走（バーニングロード）』

『ＨＣ－Ｒ』

アインス

『雷電閃光（ライトニングレイ）』『能力無効（アンチセプト）』

ツヴァイ

『？？？？』

ドライ

『重力加担（グラビテーション）』

フィーア

『墳骨再身（ボーンリミット）』

フュンフ

『？？？？？』

ゼクス

『？？？？？』

ズィーベン

『？？？？？』

第十八話　総隊長理《ビリーヴ》（前書き）

遅れてすみませんでした。

あ…ありのまま　今（週）起こった事を話すぜ！

『おれは小説を書いていたと思ったら　いつのまにか消されていた』

な…何を言ってるのかわからねーと思うが

おれも　何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

削除だとかボッシュートだとか　そんなチャチなもんじゃあ

断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

第十八話　総隊長理《ビリーヴ》

ＳＩＤＥ　『ＨＥＡＶＥＮ』

バンッ！！！！！！！！！

その一室を揺るがすことができると思えるほどの音が、部屋に響いた。

途端、その部屋にいた人間は静まり返る。

音源は、机。

所謂、巷で言うところの美少女が、その美しい顔に怒りの表情を浮かべて、

手が赤くなるほどの強さで机を叩いたのだ。

部屋内が静まり返ったのも、その音以外にも原因がある。

元々彼女は、とてもおとなしい性格で、自ら強気に出ることは、その自らが愛して止まない男の事情以外にはありえないからである。

だが、部屋内に居る人間は、彼女が怒っている理由を知らなかった。

勿論、先ほど言った特徴が嘘……というわけでもない。

ただ、彼女は怒った。どうしてと言いたそうな表情も同時に浮かべ、叩いた机の正面に座って、山のような書類を片っ端から無表情で片付けている美少女を睨む。

「どうして…………ですか？」

机を叩いた彼女――――『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の実働部隊で、若く優秀な芽を集めた『特殊部隊』の隊員である涼風琴雪は、同時にその『特殊部隊』の隊長であり、尚且つ、この『ＵｎＩｎｓｔａｌｌ』の総隊長の代わりをしている少女に尋ねる。

だが、その質問にも答えず、総隊長代理の佐屋紫は、黙々と仕事をこなしていく。

周りの人間は、黙って成り行きを見届けることにする。

どうやら、彼らも、おとなしい少女が怒っている理由を察したらしい。

「どうしてって聞いているんです！！　答えてよ総隊長代理！！！！」

名前で呼ばず、役職名で呼ぶ。彼女自身、きっと分かっているのだろう。

彼女が怒っている理由を起こしたのは、きっと総隊長という地位に縛られた結果なのだと。

だが、彼女は今更、怒りの矛先を変えることはできなかった。

「答えろ！！！！！！！！！！！！」

再び、部屋が揺れそうなほどの音が起きる。

だが、今回は声だ。怒号。

そして、それと同時に、

空気が軋んだ。

キィ、キィ、と、なんとも言えない不快な音……そう。
まるでキッチンのシンクの上に、ドライアイスを載せたような音が、
この部屋内にも聞こえる。

その音は不快で、不愉快で、何よりも特徴的だった。

だからこそ、その音にいち早く対処できたのだろう。

気付けば、彼女は視界が縦に１８０度回転していた。
そして、その事実に気付いた瞬間、彼女は冷たい、表面に薄く氷の張っている床に横になって落ちる。

「ぐっ！！？」

彼女は起き上がろうとしたが、どうやら頭を打ったようだ。
中々起き上がれない。

そして、その原因を作った張本人が、横になっている彼女の前に立つ。

「な……にを……するん、ですか」

「涼風、俺達は仲間だ。なら、いくら事情があったって、
俺の目の前で、俺（テメエ）の仲間が別の仲間に能力を使おうとすんのを、俺

は見過ごせない」

その部屋にいた人間……男、荒祇聊爾は、自身の能力である『空間歪曲（ロスト メビウス）』を使い、彼女を一瞬にして床に伏せさせたのだ。

だが、そこに一声かけたのは、他ならぬ当事者。

「聊爾。良いのよ」

「……分かった、了解した。……すまないな、涼風」

床に未だ伏せている彼女に一声かけた後、部屋の隅に彼は戻り、壁に背を着く。

すると、隣から声がかけられる。

「聊爾……」

「ん？　ああ、分かってる不知火。分かってるから。それに俺は元々、人の心情には深入りしないね」

この、建物の中では無力である能力を持つ彼女、不知火奏華は、自らに何もできないことを悔いて、歯軋りをした。

「私だって……嫌だったわよ。アイを――――

「ならどうして！！！！！　哀くんは、私達の為に戦ってくれたんだよ！？

なのに、なのに追放なんて、酷すぎるよお……」

既に立ち上がった彼女は、まだ諦めないとばかりに、机に座る彼女に問う。

それはまるで、問いていた。

総隊長の座を、何千何万の能力者を無視してまで、
たった一人の自分にとっての大切な人を、抱きしめることができるのかどうか。

第十八話　総隊長理《ビリーヴ》（後書き）

新手（だれ）のスタンド？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3781p/

In The Material ? ~ Slaughter In The HEAVEN~

2011年5月25日00時40分発行